

# 東北地方続縄文文化小考

—仙台平野の事例を主にして—

相 澤 清 利

## 1. はじめに

東北地方の4世紀を前後する頃、その北部には北海道に起源を持つ続縄文文化、南部には古墳文化と、生業基盤の異なる2つの文化が対峙していた。しかし、両文化は、近年の調査事例からみると、むしろ積極的に交流、交易を行っていたようである。

小論では、比較的北海道系の遺物が多く出土する宮城県多賀城市山王遺跡の調査に携わった1人として、主に仙台平野からみた続縄文文化（後北C<sub>2</sub>・D式～北大I式期）の課題と研究の方向性をさぐってみたい。

## 2. 東北地方における続縄文文化関連遺跡の実態とその分布

北海道に分布の中心を持つ続縄文土器は、後北C<sub>2</sub>・D式の時期にその分布を拡大することが知られている。東北地方における後北式土器の分布については、ほぼ福島県までの6県におよび、特に青森・岩手・宮城県の河川流域に面した場所に色濃く分布していることが確認されている。

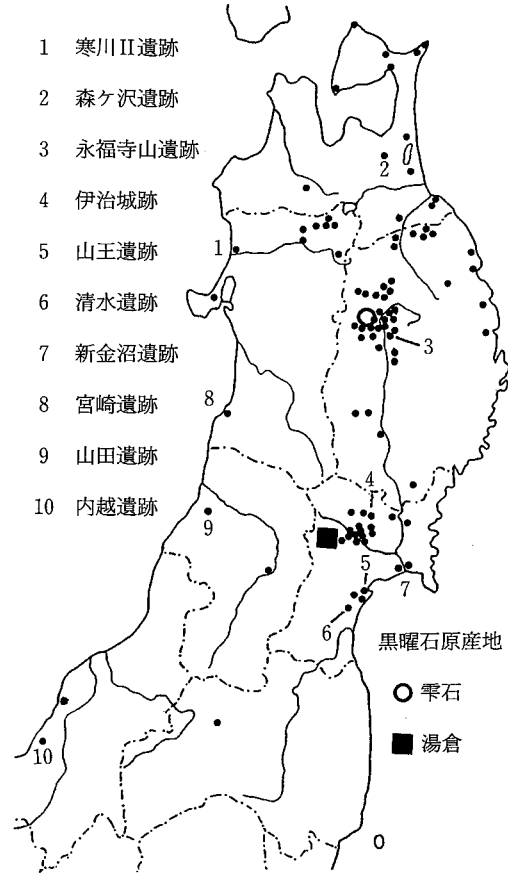
東北地方で後北C<sub>2</sub>・D式土器および北大I式土器を出土した遺跡は、90遺跡を上まわるとみられるが、発掘調査によるものは少なく、断片的な資料が多いため、遺跡の実態が不明なものが大半を占めている。しかし、その分布のあり方からみると、青森・秋田県では分散的であるが、岩手県では盛岡周辺、宮城県では岩出山周辺と集中する傾向がある。後者の両地域は、北上川、江合川の大河流域に面する山間地で、なおかつ黒曜石原産地(雫石、湯倉)を背後にもつ点で共通した立地条件にある(註1)。

この時期の具体的な文化様相については、続縄文文化様式の土壌墓が発見されている以外、まだよくわからない点が多い。相原康二氏によれば、『東北地方において、このような北海道内と同じ様式をもつ墓が分布する意味は、それぞれの地域に一定期間居住して、土器を製作・使用し、墓壙に葬られた』と考えられている(相原康二 1982)。また、石井淳氏は、『遺物量が少ない痕跡的な遺跡と数基の土壌墓から成る遺跡が圧倒的に多い事実から……後北C<sub>2</sub>・D式土器を担う集団は、簡略なテント等において、比較的小人数で日常的な生活を営み、短期間に頻繁に移動を繰り返していたもの』とされている(石井淳 1997)。いずれの評価についても妥当なものと思われ、総体的な実態としては、様々な動きを示す

集団が複数存在していたのだろう。

住居形態について辻秀人氏は、続縄文様式の竪穴住居跡がこれまでのところ東北地方では発見されていないので、平地式の形態を考えられている（辻秀人 1996）。現状では地下に痕跡が残さない簡易かつ多様な形態が想定されよう。

伝播経路については、従来、内陸部の水系利用が考えられてきたが、近年、新潟県でも飛び地的に発見されてきたことにより、日本海ルート of 海上路も想定されるに至っている。また、岩手県久慈市、宮古市、宮城県石巻市の沿岸部での発見もあるので、太平洋側の海上路を利用した経路も今後十分考慮されよう。そして、仙台平野への伝播についても、海と河川をつないだルートで検討することが必要かと思う。



第1図 東北地方の主な後北C<sub>2</sub>・D式土器  
北大式等の分布（高橋：1994を一部改変）

### 3. 続縄文土器の年代観

ここでは、後北C<sub>2</sub>・D式、北大I式の年代観を調査事例を引きながら検討していくことにする。後北C<sub>2</sub>・D式の細分編年は大沼忠春氏の4段階案を引用する（註2）。

北海道では、札幌市K135遺跡において、東北地方弥生時代終末期の土器と後北C<sub>2</sub>・D式土器（2段階）が遺物包含層中で共伴したとされている（上野・加藤 1987）。札幌市北大構内遺跡では、北大I式期の遺物包含層中から古墳時代中期の土師器が出土している（横山英介 1986）。この他、網走市内の遺跡で後北D式土器と古墳時代前期の竪櫛が土壌内で伴出しているという（畠山三郎太 1966）。

東北北部では、秋田県寒川II遺跡第2号土壌墓内で弥生時代終末期の土器と後北C<sub>2</sub>・D式土器（2段階）とが共伴している。また、第4号土壌墓からは短冊形鉄斧が出土している（小林克他 1991）。盛岡市永福寺山遺跡では、古墳時代前期の土師器、鉄鎌等の鉄器が後北C<sub>2</sub>・D式土器（2段階）と土壌墓内で共伴したとされている（津嶋知弘他 1997）。さ

らに、平成7年の滝沢村大石渡V遺跡の調査では、43基の焼土遺構が群集して検出され、後北C<sub>2</sub>・D式土器と古墳時代前期の土師器が遺構内で共伴して出土している（井上雅孝1996）。秋田県宮崎遺跡のS I 02竪穴住居跡埋土中から南小泉式の土師器片と北大I式の土器片が集中して出土している（西目町教委 1987）。

山形県鶴岡市山田遺跡では、竪穴状遺構より、北大I式古段階の深鉢と南小泉式前半の土師器甕が床面から出土している。北大I式土器は現地で製作したと推測されている（松田亜紀子 1998）。

新潟県内越遺跡では、竪穴住居跡埋土中で畿内第V様式末期の土器と後北C<sub>1</sub>式の新しい段階の土器が検出されている（大森勉他 1983）。この共伴事例は、後北C<sub>2</sub>・D式の上限が畿内第V様式末をさかのぼらないことを示しており、大略、後北C<sub>2</sub>・D式の1段階～2段階が後続する庄内式期に併行することになる。

さて、宮城県では佐藤信行氏らによって江合川流域の資料をもとに、該期の研究が進められてきており、後北C<sub>2</sub>・D式が塩釜式、北大I式が南小泉式に併行すると考えられてきた（佐藤信行 1976）。近年では、石巻市新金沼遺跡で古墳時代前期の竪穴住居跡12軒が検出され、そのうち1軒から後北C<sub>2</sub>・D式の深鉢が出土した（註3・芳賀英実 1997）。また、県北の築館町伊治城跡では、豪族居館に関連する溝跡から古墳時代前期の土師器（塩釜式）と北大I式土器が出土し、両者は確実な共伴関係にあったと報じられ（佐藤則之 1992）、北大I式の古い段階が4世紀の後半までさかのぼることになった。これらの新しい知見が得られている中で、多賀城市山王遺跡は、以前より古墳時代中期の土師器と後北C<sub>2</sub>・D式土器（註4）の関係がとらえられた遺跡とされてきた（第3図）。しかし、北海道、東北北部での該種土器の共伴関係よりも、後北C<sub>2</sub>・D式の方が一時期新しいため、伝世品の可能性（佐藤信行 1984）、あるいは前代のものが後代の遺構に混入したのではないかとの指摘もされている（高橋誠明 1998）。山王遺跡と伊治城跡の調査例から導きだされる問題点は、各々の土師器と伴出した続縄文土器の新旧型が逆転している点にある。現時点では、他地域の共伴例から、後北C<sub>2</sub>・D式が南小泉式（5世紀）まで下りてくる可能性は、極めて低いと言わざるを得ない。筆者は、山王遺跡の例は、遺構内には前代の塩釜式が全く含まれていないことから、単なる混入ではなく、伴出した土師器（南小泉式）および黒曜石製石器等とともに意図的に投入したものと考える。そして、さらに解釈を加えるならば、この後北C<sub>2</sub>・D式土器は、4世紀代にこの集落に持ちこまれた後、伝世的な取り扱いを受けたか、あるいは他地域で伝世していたものが黒曜石とともに搬入されたか、2つのケースが考えられるが、いずれにしても最終的には、5世紀代前半の祭祀に使用、遺棄されたものと推察する。

北大Ⅰ式の終焉については、青森県森ヶ沢遺跡例（阿部義平 1998）から5世紀後葉までは存続していたと考える。森ヶ沢遺跡より年代的に下る秋田県田久保下遺跡では、土壇墓8基が検出されているが、副葬された土器は、土師器、須恵器のみで構成されており、純粹な北大式は出土していない（註5）。また、これまでのところ、東北地方で発見される北大式はⅠ式が多くⅡ式はほとんどみることができない。このことは、Ⅱ式の段階から東北北部では、北大式系列は払拭され、土師器および土師器類似土器がより主体性を持つようになり、北海道とは異なる土器文化に変容していったと解される。

したがって、田久保下遺跡例は、北大式系列の土器を全く含まないことから、北大Ⅰ式終焉後の土器群と想定される。とすれば、北大Ⅰ式から北大Ⅱ式への移行は、森ヶ沢・田久保下遺跡例の年代観から、6世紀の初頭頃に求めることができようか。

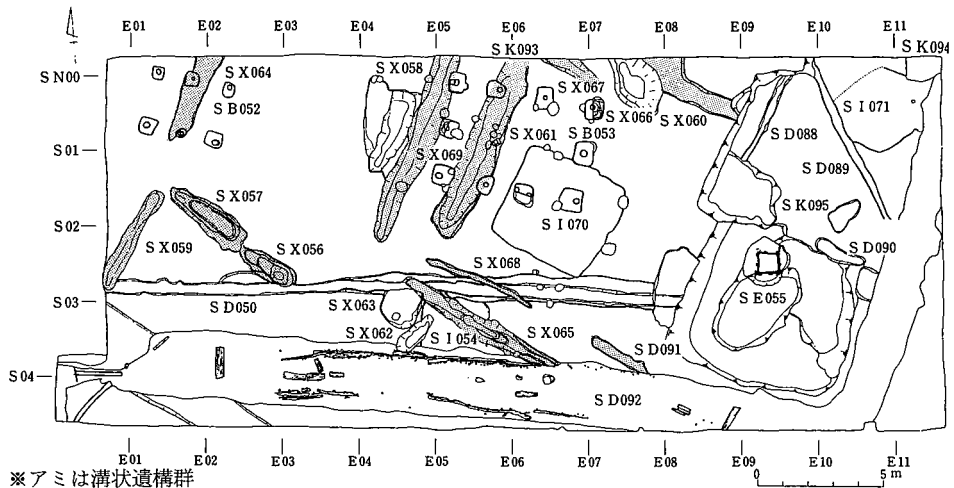
以上をまとめると、後北C<sub>2</sub>・D式の1段階～2段階が東北地方弥生時代後期後半＝庄内式併行期、3段階～4段階が古墳時代前期（塩釜式）前半、北大Ⅰ式が古墳時代前期後半～中期（南小泉式）と概ね抑えられる。

#### 4. 黒曜石製石器について

黒曜石製石器は、皮革加工の道具として用いられたほか、近年、東北地方では、土壇墓の埋土中へ投入する葬送儀礼に使用した例が増えている。

北より青森県森ヶ沢遺跡、岩手県大石渡遺跡・岩崎台地遺跡群、秋田県田久保下遺跡等で剝片を主として供献している。宮城県内では、仙台市沼向遺跡で、円墳、方墳に隣接して土壇墓が数基検出されている。そのうち1基は5世紀代のもので、埋土中から剝片・破片が検出されているという（註6）。古墳文化圏で初の事例として注目される。

一方、宮城県内では竪穴住居跡から出土する例も出てきている。4世紀代では、小牛田町山前遺跡30号住居跡の床面よりラウンドスクレイパー1点（註7）、瀬峰町大境山遺跡で複数の住居跡埋土中よりスクレイパーが若干の他、剝片・破片が比較的多く出土している（阿部正光他 1983）。5世紀代では、仙台市南小泉遺跡（第30次調査）で、南小泉式期の竪穴住居跡12軒が検出されており、住居跡の床面・埋土、基本層等からスクレイパー、剝片、石核等が総数31点出土している。石器の中には使用痕が観察されるものがあるという（工藤信一郎他 1998）。多賀城市山王遺跡町地区でも竪穴住居跡2軒の貯蔵穴底面よりスクレイパー2点、石核1点が出土している（村田晃一他 1998）。古川市名生館遺跡では6世紀前半の住居跡床面・埋土中または奈良・平安時代の遺構に混在してスクレイパー62点の他、多量の剝片・破片・石核等が出土している。このうち6世紀初頭のS I 1215住居跡には、床面で破片が集中する範囲があり、石器を製作していたと考えられている（高橋誠



第2図 多賀城市山王遺跡第3次調査遺構配置図

明 1991)。このような状況は、古墳文化の生活様式で暮らす人々によって石器が製作・使用されていたことを示唆しているものと思われる。

祭祀儀礼に関連するものとしては、村田町新峯崎遺跡検出の土壌例がある（阿部・岩見 1991）。5世紀中葉頃の時期で、多量の土師器、石製模造品がL字型の掘り込みに、祭祀終了後一括して遺棄されたと考えられている。ここで注目したいのは、共伴した1点の黒曜石製残核状石核である。この石核については、祭祀場において剥片の剝離が行われた後、この土壌に土器等とともに持ち込まれ、遺棄されたのではないかと推察される。

もう1つは、多賀城市山王遺跡西町浦地区第3次調査の例がある（高倉敏明他 1981）。この調査区を構成する5世紀前半代の遺構は、竪穴式住居跡2軒、溝状遺構群、S X 058遺構（旧3号遺構）を含む土壌4基の3形態からなる。

竪穴式住居跡は、S I 070住居跡が南北4.2m、東西4.3mの方形で、床面に2ヶ所の焼土が認められる。床面からは、土師器（杯・甕・高杯・小形手捏土器）のほかに石製模造品（剣・有孔円板）とその未製品・白玉1点、砥石1点、黒曜石製石器（スクレイパー）1点が出土している。S I 071住居跡では、床面に3個の土師器甕が据えられた状態で検出され、その内1点が焼土の中に埋め込まれた状態で出土している。石製模造品の原石、剥片も検出されている。

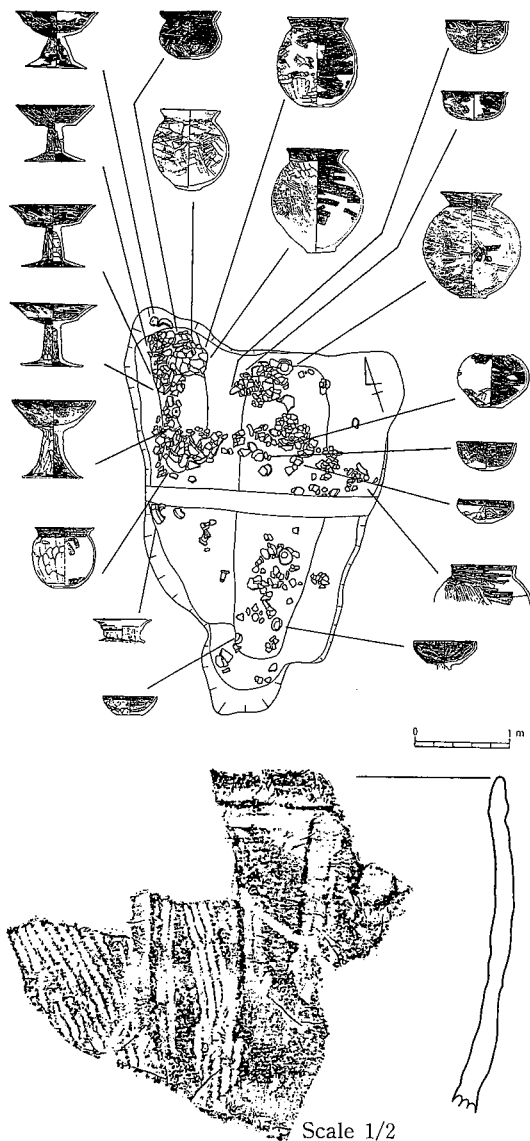
溝状遺構群は、一定の方向性を持つこと、互いに直角の方向でコーナー部分が隅切れの形態になること、互いに重複することがないことなどの特徴がある。各溝の埋土は、地山土起源のシルトが主体となっているが、その間に炭化物層と灰層が数枚介在する。そして、底面付近に推積する炭化物層上面に遺物が集中する傾向がみられる。出土する遺物には、土師器（杯・高杯・壺・甕）、石製模造品（剣・有孔円板・白玉）・未製品・原石・剥片、

琥珀玉、ガラス玉、獣骨(シカ)、黒曜石製剥片4点・石核1点がある。

S X 058遺構は、平面形が南がせまく北が広いフラスコのような形態の土壌である。底面には東と西の2カ所に落ち込みがみられ、断面はゆるい舟底形である。埋土中に2枚の炭化物を多量に含む層があり、底面上の炭化物層中から多量の土師器等が出土している。出土状況を見ると、落ち込み部の上に多く、西側には高杯類、中央北壁部には甕類、東側には杯類が多い。器種は、杯・高杯・壺・小型壺・甕などで、特徴として朱塗の杯や高杯が極めて多いことがあげられる。これらとともに石製模造品(有孔円板2点・白玉7点)琥珀玉7点、続縄文土器(後北C<sub>2</sub>・D式)、黒曜石製石器(スクレイパー)1点、黒曜石製剥片・碎片8点が出土している。

これらの遺構の性格については、堅穴住居跡が石製模造品製作跡(高倉敏明他 1981)、溝状遺構群が方形周溝墓の可能性(藤沼邦彦 1991、高倉敏明 1991)、S X 058遺構が土壙墓または祭祀遺構と推察されている(高倉敏明 1991)。また、後2者を石製模造品の製作に関する集団が残した特殊なあり方を示す祭祀遺構とする考えもある(阿部・岩見 1991)。

溝状遺構群は、形状の面を重視すると、方形周溝墓の溝の一部の可能性も考えられるが、区画の構成が不明瞭であること、溝に不連続性があることから断定するには至っていない。3者は、いずれも同一の方向性のもとに構築されていること、遺物の組成に共通性があること、土師器についてもほとんど時期差がないことから、同じ祭祀体系の中でつながって



第3図 山王遺跡 S X 058遺構土師器  
出土状況(上)と後北C<sub>2</sub>・D式(下)

いたとみるべきであろう。筆者は、石製模造品の製作についても、その行為自体が祭祀体系の一環に位置づけられていたと考えており、この住居内または周辺で祭祀儀礼が執り行われ、祭祀終了とともに溝状遺構群・S X 058遺構へ遺物を遺棄したものと推定する。

この第3次調査区の東側約150m地点の東町浦地区第4次調査区でも溝状遺構群が検出されている。ここでは、溝内より石製模造品（剣・有孔円板）・未製品・剝片、砥石が埋納されたかたちで出土した。ここでとりあげたいのが砥石である。砥石は石製模造品を製作する際の道具であるが、祭祀具と同様に扱い並べて埋めていたことである。つまり、祭祀具を作る道具自体も神聖なものとして大事に扱われていたことを示している。したがって、このことを参考にすれば、黒曜石製石器もなんらかの祭祀具を作る際に使用された道具の可能性があり、その結果、古墳文化の祭祀具とともに埋められていたとも解釈される（註8）。

山王遺跡では西町浦地区の調査以来、東町浦、町、八幡地区と広範囲に各地区から石器を主として北海道系遺物が出土している。八幡地区は、5世紀前半の竪穴住居跡24軒とそれに伴う祭祀遺構4基、遺物包含層（ゴミ捨て場）が検出されている（菅原・吾妻 1994、千葉・鈴木 1997）。祭祀遺構からは土師器（杯・甕・高杯）、石製模造品（剣・有孔円板・白玉）が不整形の凹地に堆積する炭化物・焼土層中より散乱した状態で出土している。遺物包含層では、多量の土師器の他木製品、骨角器、卜骨、石製模造品、動物遺体、植物遺体が廃棄されている。黒曜石製石器等は祭祀遺構、遺物包含層中には皆無であり、この地区の祭祀には関わりを持っていなかったと考えられる。報文では稲作を生業の基盤としながらも、狩猟具の存在やシカ・イノシシ等の動物の骨も比較的多く含まれていることから、狩猟も重要な生業の1つであったとしている。この地区から出土する黒曜石製石器は使用痕分析により生皮、あるいはなめし皮に対するスクレイピングが推定されている（須藤・高橋 1997）。石器はシカなどの動物を解体した後、皮革加工に使用されていたのであろう。

ここで、八幡地区と西町浦地区の黒曜石製石器等の組成について比較してみると、八幡地区では、剝片を含む全資料36点のうち典型的なラウンドスクレイパーが10点と高い比率を占めている。ところが、西町浦地区では35点中ラウンドスクレイパーは1点も含まれておらず、不定形な剝片を素材として一部にエッジを付けるスクレイパーが5点を占める程度である。その大半は1～2.5cmの剝片であり、製作時に切断されているものが多い。この石器組成の相違は、両地区の性格の違いを傍証しているものと思料される。

高橋誠明氏は、前出の古川市名生館遺跡の状況について石器製作跡であり、他の地域にも供給していたとされている（高橋誠明 1998）。名生館遺跡と同様にスクレイパー、剝片、破片、石核が伴う例は南小泉、山王遺跡でも認められている。このことは、基本的に原石

が集落に搬入され、現地で石器を製作し、併せて皮革加工も行われていたからと推察する。なお、山王遺跡では、刃部再生がなされた石器も確認されることから、今後、各遺跡で剥片、碎片の形状を含めて注意をはらう必要がある。

## 5. まとめにかえて

以上、古墳文化圏の仙台平野において北海道系の黒曜石製石器が約一世紀の間、皮革加工の道具として、あるいは祭祀具として使用されるという二面性が確認された。加えて、山王遺跡の例をとれば、同じ対象の祭祀体系のなかで、滑石、黒曜石という石材の違いはあるにしろ、剥片、碎片を儀礼行為に使用するという共通意識が看取されたことは興味深い。その精神文化の背景に何があったのだろうか、検討課題としたい。

湯倉産黒曜石は、井上真理子氏によれば灰と黒の縞状をなし、1mm以下の白色含有物を含み、不透明質の特徴を有するとしている(井上真理子 1985)。また、佐藤信行氏は、宮城県内出土の黒曜石製石器等の大半がこの石質で占められており、井上氏とほぼ同様な特徴を説明されている(佐藤信行 1984)。近年、仙台平野で出土した黒曜石製石器等についても、その9割以上が同じ特徴を持つことを確認している。

湯倉産黒曜石の供給先は、4世紀代では主に宮城県北の江古川流域とその周辺に限られていたが、5世紀に入ると岩手県域の北上川中上流域(註9)、そして、仙台平野、村田盆地と急激にエリアを拡大することになる。さらに、その外郭圏は秋田、青森県までにおよぶ。この現象は、5世紀に入り古墳文化側の関与がより強まり、湯倉産原石の流通経路の広域化が計られたとすることができる。期を同じくして、北上川中流域に古墳文化の進出(古墳・集落)があり、さらに続縄文土器(北大I式)と黒曜石製石器との関係が認められなくなるのもこの時期とされている(註10)。

その後、湯倉産黒曜石は、北上川中流域では7世紀まで継続して使用されるが、仙台平野では6世紀以降関係はみられなくなる。

最後に続縄文文化南下の要因として留意しておきたいのは、栽培食物である。東北部の人々は、弥生時代前期に稲作と米食を知ることとなるが、後期に入ると稲作の痕跡も不明瞭となり、遺跡数も極端に減少する。これは気候の変動が原因で(福沢仁之 1996)、稲作適地が東北南部まで後退したためであろう。このことを表したのが天王山式土器の南下現象であり、東北部の人々が米食指向であったことを示唆している。この後の後北C<sub>2</sub>・D式土器は、弥生時代末期の土器とも密接な関係を持っているので、雑穀を含めた栽培食物への指向が北海道系の人々に内在していた可能性も今後の研究視点として考慮されよう。



本稿を草するにあたり下記の方々よりご教示、ご協力いただいた。記して感謝申し上げます。

青山博樹、井上雅孝、太田昭夫、斎野裕彦、佐藤甲二、佐藤信行、佐藤嘉広、神 康夫、仙波伸久、高橋誠明、高橋 学、高橋 哲、千葉孝弥、芳賀英実、山川純一、藤沼邦彦、村田晃一

(註)

- (註1) 遺跡集中地域と黒曜石原産地の相関関係については、小野裕子氏(1998)がすでに述べられている。
- (註2) 大沼忠春氏は、後北C<sub>2</sub>・D式を「C<sub>2</sub>・D式初」→「一般的なC<sub>2</sub>・D式」→「C<sub>2</sub>・D式後葉」→「C<sub>2</sub>・D式末」と細分している(1982)。ここではこれを1段階～4段階と読み替えることとする。
- (註3) この後北C<sub>2</sub>・D式は、器形、文様等は北海道の後北式そのものであるが胎土、焼成、色調が土師器に良く似ているのが観察されている。時期は文様の特徴から判断すると、大沼氏編年の2段階と3段階の中間的様相を呈する。
- (註4) この後北C<sub>2</sub>・D式は、器高10cm前後の小型の鉢もしくは注口土器と推定される。胎土は、土師器に比べて粗く、金雲母を混入する特徴を持つことから搬入品の可能性が高い。同様な特徴は、名取市清水遺跡の後北C<sub>2</sub>・D式にもみられる。山王遺跡例は、口縁部文様帯の簡素化、体部文様帯の直線化、三角形刺突文の欠如、微隆起線文の粗雑化がみられる。大沼氏編年の3段階～4段階に位置づけられる。
- (註5) 田久保下遺跡の年代観は、土師器、須恵器から6世紀前半～中葉とされている(高橋学 1992)。土師器の内壺2点は、杯に比べ一型式古い様相があり、器面が磨滅していることも併せて、伝世品の取り扱いがなされていたことを示す例である。なお、岩手県内の北上川中流域では、7世紀代の古墳、竪穴住居に5世紀後半～6世紀の鉄製品、須恵器が伝世しているという。統縄文文化側において古墳文化側の文物を伝世品的に取り扱う習慣の存在が推定されている(相原康二 1992)。
- (註6) 佐藤甲二氏のご教示による。土墳墓に統縄文的属性はみられないという。
- (註7) 山前遺跡出土資料を再整理された青山博樹氏のご教示による。
- (註8) 同様の見解は藤沼邦彦氏も述べられている。ただし、このことに関連して氏は、山王の集落へ直接的な統縄文文化に属する人々の到来を考えている。ここで、詳細を論ずることはできないが、仙台平野への黒曜石の搬入は、間接的な交易による可能性もある。
- (註9) 佐藤嘉広氏によれば、北上川中上流域では、弥生時代末から古墳時代前期までは北方の置戸、男鹿、出来島から搬入されているが、古墳時代中期以降は、南方の湯倉産が70%以上を占めるという(1998)。
- (註10) 仙台平野を含む宮城県内については高橋誠明氏(1998)、岩手県の北上川中上流域の状況については佐藤嘉広氏(1998)が説かれている。

【引用文献】

- 相原康二 1992 「古代の集落と生活—蝦夷の集落」『新版〔古代の日本〕』第9巻東北・北海道 角川書店 pp.137~162
- 阿部義平 1998 「本州北部の統縄文文化—森ヶ沢遺跡を巡って—」『考古学ジャーナル』436 pp.16~20
- 阿部・岩見 1991 「新峯崎遺跡」『村田町文化財調査報告書』第9集
- 阿部正光他 1983 「大境山遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第4集
- 石井 淳 1997 「北日本における後北C<sub>2</sub>・D式期の集団様相」『物質文化』63 pp.23~34
- 井上真理子 1985 「大木冨貝塚出土の黒曜石製石器の原石起源について」『北奥古代文化』第16号 pp.1~31
- 井上雅孝 1996 「滝沢村大石渡V遺跡」『第16回岩手県考古学会研究大会発表資料』 pp.20~23
- 上野・加藤 1987 「K135遺跡4、5丁目地点」『札幌市文化財調査報告書』XXX
- 大沼忠春 1982 「後北式土器」『縄文土器大成』5 統縄文 講談社 pp.127~129
- 大森 勉他 1983 「内越遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第33集
- 小野裕子 1998 「北海道における統縄文文化から擦文文化へ」『考古学ジャーナル』436 pp.4~10
- 工藤信一郎他1998 「南小泉遺跡第30・31次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第226集
- 小林 克他 1988 「寒川I遺跡・寒川II遺跡」『秋田県文化財調査報告書』第167集
- 佐藤信行 1976 「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』寧楽社 pp.265~298
- 佐藤信行 1984 「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究』1 清文堂 pp.426~478
- 佐藤則之 1992 「伊治城跡・第18次調査」『築館町文化財調査報告書』第5集
- 佐藤嘉広 1998 「東北地方一特に中・北部の古墳期の石器のありかた—」『考古学ジャーナル』433 pp.9~14
- 菅原・吾妻 1994 「山王遺跡I」『宮城県文化財調査報告書』第161集
- 須藤・高橋 1997 「山王遺跡出土石器の使用痕分析」『多賀城市文化財調査報告書』第45集 pp.151~173
- 高倉敏明他 1981 「山王・高崎遺跡発掘調査概報」『多賀城市文化財調査報告書』第2集
- 高倉敏明 1991 「第2章・遺跡・遺物—多賀城市内の遺跡」『多賀城市史』第4巻考古資料 pp.152~159
- 高橋誠明 1991 「名生館官衙遺跡XI」『古川市文化財調査報告書』第10集
- 高橋誠明 1998 「角塚古墳前夜の大崎平野」『角塚古墳シンポジウム』〔最北の前方後円墳〕
- 高橋信雄 1994 「北海道の統縄文文化と東北」『北日本の考古学』吉川弘文館 pp.72~90
- 高橋 学 1992 「秋田ふるさと村建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書・田久保下遺跡」『秋田県文化財調査報告書』第220集
- 津嶋知弘他 1997 「永福寺山遺跡」盛岡市教育委員会
- 西目町教委 1989 「宮崎遺跡発掘調査報告書」
- 千葉・鈴木 1997 「山王遺跡I—仙塩道路建設に係る発掘調査報告書—」『多賀城市文化財調査報告書』第45集
- 辻 秀人 1996 「蝦夷と呼ばれた社会」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版 pp.215~248
- 芳賀英実 1997 「石巻市新金沼遺跡」『平成9年度宮城県遺跡調査発表会発表要旨』
- 畠山三郎太 1966 「北海道の馬蹄状堅櫛について」『北海道考古学』2
- 福沢仁之 1996 「稲作の拡大と気候変動」『季刊考古学』第56号 雄山閣 p.49~58

- 藤沼邦彦 1991 「第1章・各時代の概要・古墳時代の多賀城」『多賀城市史』第4巻考古資料 pp.14~18
- 藤沼邦彦 1997 「第5章・古墳時代」『多賀城市史』第1巻原始・古代・中世 pp.175~205
- 松田亜紀子 1998 「山田遺跡出土の統縄文土器について」『山形県地域史研究』23 pp.16~23
- 村田晃一他 1998 「山王遺跡町地区の調査―県道泉塩釜線関連調査報告書II―」『宮城県文化財調査報告書』第175集
- 横山英介 1986 「北大構内の遺跡」5

## 1998年度 宮城県考古学会活動状況

### 平成10年

- 5月17日 設立総会、記念講演会、懇親会
- 30日 連絡紙幹事会（連絡紙の発行時期、編集内容の検討）
- 6月7日 会誌幹事会（「宮城考古学」投稿案内の検討）
- 13日 総務幹事会（会員名簿、事務局業務、会計について）
- 20日 企画幹事会（遺跡調査成果発表会、総会の内容について）
- 24日 第1回代表幹事会（会の運営について）
- 25日 「宮城県考古学会連絡紙」第1号発行
- 7月25日 第1回役員会（会の運営方針、顧問の推薦について）
- 9月11日 故阿部正光氏告別式に参列（弔辞、献花）
- 10月18日 企画幹事会（宮城遺跡調査成果発表会の内容について）
- 27日 第2回代表幹事会（会誌、連絡紙、遺跡調査発表会等について）
- 11月1日 会誌幹事会（「宮城考古学」編集内容について）
- 11月15日 「宮城考古学会連絡紙」第2号発行
- 19日 企画幹事会（遺跡調査成果発表会の準備について）
- 12月12日 「宮城県遺跡調査成果発表会」開催
- 第2回役員会（会の活動について）

### 平成11年

- 1月5日 連絡紙幹事会（宮城県考古学会連絡紙第3、4号の内容について）
- 17日 会誌幹事会（「宮城考古学」第1号の内容について）
- 18日 企画幹事会（遺跡調査成果発表会の決算、平成11年度総会について）
- 23日 第3回役員会、新年会（会誌、連絡紙、平成11年度総会等について）
- 25日 古墳時代研究部会設立
- 2月27日 古墳時代研究部会第1回研究会
- 3月3日 企画幹事会（平成11年度総会、研究発表会の開催と準備について）
- 14日 会誌幹事会（「宮城考古学」第1号の内容について）
- 17日 第3回代表幹事会（会誌、総会、研究会、連絡紙について）
- 27日 第4回役員会（平成11年度総会、研究会、会誌、連絡紙について）